

歴史文化クラブ 2019年9月度研修会

世界文化遺産 百舌鳥古墳群

—河内王朝の実像を求めて—

1. 実施日： 令和元年9月11日（水） 雨天実施
2. 集合場所： 近鉄西大寺駅南口 8：30出発
3. 交通機関： 生駒交通デラックス中型バス 28人乗り
4. 参加費（堺市博物館入館料を含む）： 4000円
5. 行程スケジュール：

近鉄西大寺駅南口 → 大仙公園駐車場 → 堺市博物館（講演と見学） →
都市緑化センター（昼食） → **（ガイド案内）** 石津が丘古墳（履中天皇陵） →
（ガイド案内） 大山古墳（仁徳天皇陵） → 堺市役所21階展望ロビー →
田出井山古墳（反正天皇陵） → 土師ニサンザイ古墳 → （帰途） →
西大寺駅南口 （18：00の予定）

* 堺市博物館⇒都市緑化センター間は、バスを回送するので希望者は利用できません

6. 資料：

- ① 百舌鳥・古市古墳群と河内王権
- ② 百舌鳥古墳群と仁徳王陵
- ③ 反正天皇の陵と土師ニサンザイ古墳
- ④ 参加者名簿、地図

奈良・人と自然の会

歴史文化クラブ

担当世話人： 田積彰男 田代一行 中井 弘

（事務局： 中井弘 090-2381-1122）

百舌鳥・古市古墳群と河内王権 by 中井弘

参考文献・「百舌鳥・古市古墳群出現の歴史的意味」(講演) 白石太一郎
・「大和王権と河内王権」 直木幸次郎 ・「私の日本古代史」 上田正昭
・「天皇陵の謎」 矢澤高太郎

I 畿内における大型古墳(大王墳)造営地の変遷

三世紀中頃～四世紀中頃	オオヤマト古墳群(大和・柳本古墳群)
四世紀前期末～五世紀中	佐紀古墳群
四世紀末頃～五世紀末頃	百舌鳥・古市古墳群

1、大王墳の造営地とヤマト王権

(1) 古墳は政治勢力の本拠地・本貫地に造られた。

古墳時代初期には、大規模な古墳はすべて大和川水系上流のオオヤマト古墳群に集中していた。このことは3世紀後半には大和川水系は一つの強固な政治的まとまりを形成しており、その中で覇権を握っていたのが奈良盆地東南部の“ヤマト”の勢力であった。

畿内における墳丘長200mを超える巨大前方後円墳の分布をみると、大和川水系の大和には21基、河内・和泉には13基みられるのに対し、淀川水系では摂津に1基がみられるにすぎない。これはヤマト王権の地域基盤が大和川水系の大和・河内・和泉にあったことを示しており、淀川水系の摂津や山城は含まれていなかった。このことは、ヤマトの勢力以外は、顕著な古墳を造れなかったものと思われる。

(2) 大和や河内・和泉の大首長を中心に首長連合を形成

この時代は日本列島の北と南を除く各地の有力首長たちが、後に天皇と呼ばれる大和や河内・和泉の大首長を中心に首長連合を形成していた時代と考えられている。

大首長、すなわち大王の墓と考えられる巨大な前方後円墳は、古墳時代前期の3世紀中ごろ過ぎから4世紀中頃には、すべて奈良盆地の東南部のいわゆるオオヤマト古墳群に築造され、4世紀前期末から後半には、奈良盆地北部の佐紀古墳群に営まれた。ところが4世紀末以降から5世紀末頃には、隔絶した規模を持つ巨大な古墳はすべて大阪平野南部の古市、百舌鳥古墳群に造営されるようになる。ヤマト王権の地域的基盤は大和・河内・和泉の地域にあったと考えられている。

II 古墳築造地が奈良盆地から河内や和泉に移動した理由

諸説があるが、大別して、以下の3説に分かれる

①王朝交代説・・・(直木幸次郎、上田正明他)

河内地方に興った新勢力が大和の政治勢力と対立し交代した

②両勢力一体化説・・・(和田萃)

大和・河内の勢力が対立していたのではなく、両者で一体化した。

③政治連合内での盟主交代説・・・(白石太一郎・矢澤高太郎)

大和・河内・和泉という政治連合の中で盟主権が大和勢力から河内勢力に移動した。

1、王朝交代説・・・(直木幸次郎ほか)

河内王権(政権)論の定義は、新しい政治勢力が河内地方に起こり、それ以前大和地域を本拠とした政治勢力に代わって、大和・河内地域を本拠とする政権が成立したとする学説である。記紀に述べる応神天皇以下4代、仁徳・履中・反正を河内王権の王としている。

(1) 大王の王宮伝承と河内王権の成立

記紀によれば応神天皇は難波の大隈宮に20年住んだとする伝承、仁徳天皇は即位の初めから難波の高津宮に都を置いたと伝えられ、次の履中天皇は難波にある大江を冠した名(大江之伊邪本和気命おおえのいざほわけ)を持ち、次の反正天皇は河内の丹比(たじひ)に都をおいて柴籬宮(しばがきのみや)といったという。応神を初代とすると四代までの天皇が、難波および河内とかかわりを持っているが、それ以前は一人として大阪平野に宮を置いた伝承を持つ天皇はいない。応神以下の四代を河内政権の王とする所以であるとしている。

(2) 河内王権を支えた河内豪族

河内政権の発展に貢献した大伴・物部・中臣・弓削氏など河内政権を構成する豪族は河内を本拠とする氏族が多かった。

大伴氏は摂津の住吉から河内・和泉にかけての海よりの地、物部氏が大和川下・域の河内渋川郡あたり、中臣氏は北河内から摂津にかけての生駒山西山麓の地域を、弓削氏については弓削郷(八尾市)、土師氏もまた志紀郡などの土師郷を本拠地としていた。

(3) 河内政権と和邇氏

河内政権の始祖・応神は和邇氏と息長氏との婚姻を通じて地盤を固めている。和邇氏は奈良盆地の北東部を根拠とする豪族であるが、木津川から京都盆地・近江平野など淀川水系に沿う地域を支配していた。

(4) 河内政権と葛城氏

仁徳・履中・反正の時代、その発展に大きな影響を与えたのは、葛城氏である。葛城の襲津彦は本拠とする葛城の地から、葛城川、大和川を下って大阪平野に進出して、長江襲津彦と呼ばれ、新興の河内政権の発展を助けた。後に襲津彦の娘・磐之媛は仁徳の皇后となり履中、反正、允恭を生んだ。襲津彦は河内政権の重要人物となり、しばしば朝鮮で大活躍した。河内政権下の海人集団と共同しこれを率いて海外進出を企てたとされる。

河内政権の王はこのような葛城氏を重んじて、大伴・物部・中臣・弓削など大阪平野を本拠地とする有力氏族を支配下に吸収して、政務を分担させたと考えられる。

2、大和・河内・和泉の政治連合内部での盟主権の移動説（白石・矢澤）

畿内の場合、大王墳を中心とした大古墳群は大和から河内・和泉へ移動し、再び大和へと移動を繰り返している。これは、大和を根拠地とする大王家が墳墓の地を移動させたのではなく、それぞれの地域の大豪族が持ち回りで継承した結果であるとする。

大阪平野南部に大王墳が営まれたということは、大阪平野の勢力がヤマト王権の盟主権を掌握したことを示している。この地に隣接していた大和の勢力が、広大な墳墓地を占拠したことを王朝の交代とか、河内勢力による大和王権の打倒などではない。

一時的に第15代応神・16代仁徳・17代履中・18代反正の4代の天皇が大阪平野に政治の中心として王宮を営んだ。19代の允恭からは遠つ飛鳥（明日香村）、20代安康が石上穴穂、21代雄略が初瀬朝倉、22代清寧が磐余と、皇居は大和の地に戻している。第26代継体天皇の場合でも、継体を支持する近江・尾張など畿内東部の勢力と、それまで同じ畿内にありながら王権に近づけなかった摂津・山城の勢力が継体を擁立援助したが、その場合でも王宮は大和に求められ、墳墓も継体一代は摂津に営まれるが、その後は河内・大和に回帰していることから理解できる。

3、河内政権の奈良盆地への移動（直木幸次郎）

倭の五王に当たるとされる允恭天皇のころから、河内政権は本拠を大阪平野から奈良盆地に遷している。主な理由としては東方に勢力を伸ばすためには、大和に拠点を持つ方が便利であることが、本拠地東遷の理由の一つとしている。

478年、雄略とされる倭王武が宋に贈った国書で、「自分の父祖が自ら甲冑をつけ、山川を跋涉して列島の統一を計った」とあり、五世紀中葉以降、畿内の政治勢力が東国へ積極的に進出しはじめたことはまず確実に、その趨勢と、河内政権の奈良盆地への移動とは

対応していると思われる。

III 百舌鳥・古市古墳群出現の東アジア史的背景

1. 東アジアの国際情勢

- ① 4世紀になると東アジアでは北方の遊牧騎馬民族・高句麗の南下という大きな波が起こった。
- ② これは朝鮮半島南部の百済や新羅にとって、国家存亡の危機であった。この時、高句麗に降伏して生き延びようとした新羅に対し、百済はあくまでも武力で対決しようとする。百済が求めたのが倭国の力であり、倭国も鉄資源などを朝鮮半島に頼っていたことから高句麗の倭国への侵攻を恐れ百済の要請に応じ、軍事同盟を結んで本格的に半島に乗り出していった。
- ③ この国際情勢に対し、邪馬台国以来の呪術的・宗教的性格が強かった大和の王権では対応できず、それ以前からヤマト王権の内部で、朝鮮半島との外交や交易を担当していた大阪湾岸の河内・和泉の勢力が外交や政治の実権を掌握するようになっていった。

2. 倭国の文明化の進展

こうした東アジアの国際情勢の大きな変化に伴い、ヤマト王権の指導権を河内・和泉の勢力が握ることになったが、その影響は単に政治的な変化に止まらなかった。

(1) 馬の導入

高句麗と戦に臨んで、騎馬文化を持たない倭国は、騎馬戦術や馬具の生産技術・馬の生産などを一から学ぶ必要があった。百済は自国の存亡にも関わる問題であり影響下にある加耶諸国も積極的に技術者を送り、技術や情報を倭国に伝えた。

(2) 先進技術の流入

この時代には朝鮮半島から多くの人材が来朝し、騎馬文化に伴う生産技術に止まらず、鉄器生産、織物、皮革、土木、須恵器生産、さらには文字の使用をはじめ多様な文化・学術・思想などが伝えられた。

(3) 渡来人の集団定着

4世紀後半以降、多くの渡来人が倭国にやってきたことは、彼らが持ち込んだ韓式系土器が広く分布していることから知られる。その分布が最も濃密に見られるのは河内平野であった。まさに多くの渡来人を受け入れ、倭国の文明化の先端を担っていたのは、大阪平野であった。奈良盆地でも南西部の葛城から飛鳥付近にはその痕跡が多く残されているが、西部や北部ではそれほどの顕著さはない。

以上

1、仁徳天皇陵古墳（百舌鳥耳原中陵）

（1）築造時期・被葬者

- ・5世紀中頃の築造。宮内庁により第16代仁徳天皇陵(応仁天皇第4皇子)として治定。
- ・百舌鳥・古市古墳群の一つで世界遺産に令和元年7月6日に登録 ㊦大山(仙)陵古墳。
(百舌鳥エリア23基・古市エリア26基の全49基が対象)
- ・一日最大2000人として延べ680万人・15年8ヶ月の期間を要したと推定される。
積土140万 m^3 として、10tダンプカーで27万台分と推定される
- ・全国に16万以上あるといわれる古墳の中で日本最大規模

（2）墳形・規模・周濠

- ・日本最大の前方後円墳。前方部を南に向けている。
全長約486m。墳丘基底部面積103,410 m^2 (甲子園球場約2個分)、体積140万 m^3
(陪塚、飛び地を含む領域は約47万 m^2 、甲子園球場12個分)
- ・後円部3段築成。直径約249m、高さ35.8m。前方部3段築成。幅約307m、長さ237m、高さ約33.9m。前方と後方のつなぎ目のくびれ部に左右に造り出しを設けている。
- ・墳丘は三段築成で、三重の濠が巡っている。現在の外濠は明治時代に掘り出されたもの。
- ・10基以上の陪塚がある。10基の陪塚が日本 書記などに伝えられる、
- ・仁徳天皇陵(百舌鳥耳原中陵)、反正天皇陵古墳(田出井山古墳)、南側の履中天皇陵古墳(石津ヶ丘古墳)は、百舌鳥耳原三陵と呼ばれ、宮内庁が管理。仁徳天皇陵は、履中天皇陵古墳よりも後で築造されたことがわかっていて、在位順序とは逆転している。
- ・クフ王のピラミッド(エジプト)、秦の始皇帝陵(中国)と並び世界三大墳墓の一つとされエジプトのピラミッドより面積は大きい。



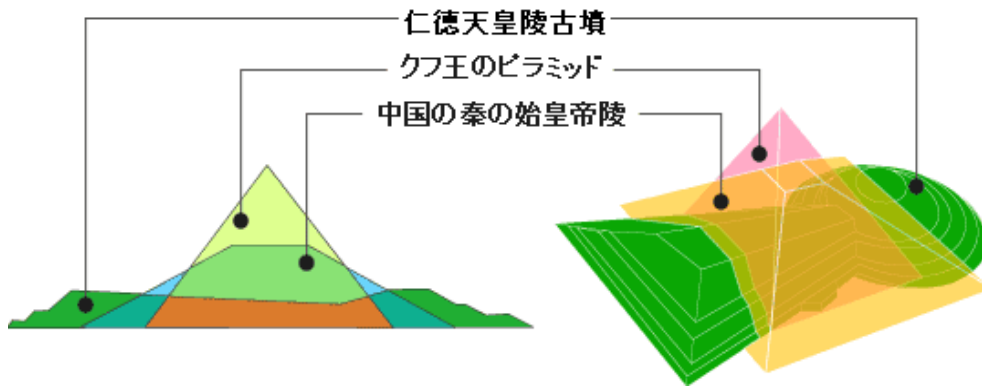
秦の始皇帝陵

(全長350m高さ76m体積300万 m^3)



クフ王のピラミッド

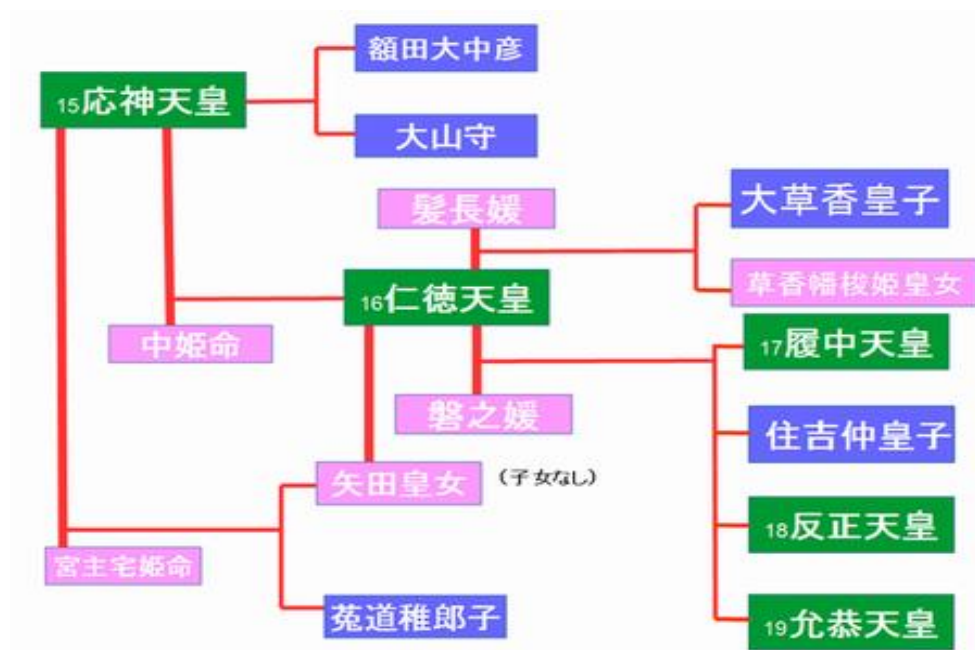
(全長230m高さ146m体積260万 m^3)



(3) 発掘・出土品・埋葬施設

- ・発掘は明治維新の直前から立ち入りが全く認められていないため、正確な情報が少ない。
- ・最近の調査で墳丘の斜面は葺石で覆われ、墳頂部には円筒埴輪が並べられていたとされている(2018年10月15日堺市と宮内庁の調査により埴輪、石敷が発見された。)
- ・江戸時代、三重濠掘削の際に、女子人物頭部の埴輪や馬の頭部の埴輪(いずれも宮内庁所蔵)が、東側の造り出しからは多数の大甕の破片が出土したとされる。
- ・昭和30年代の調査で造り出しから、須恵器の甕が出土。付近の庄屋である南家の古文書にも同様の記録がある
- ・明治5年(1872年)に前方部で竪穴式石室に収められた長持型石棺が露出し(盗掘)、刀剣、甲冑、ガラス型の壺と皿が出土したが既に埋め戻されたといわれている
- ・その他円筒埴輪・形象埴輪(人物・馬・鹿・水鳥・家形・蓋形)

①応神天皇家系図



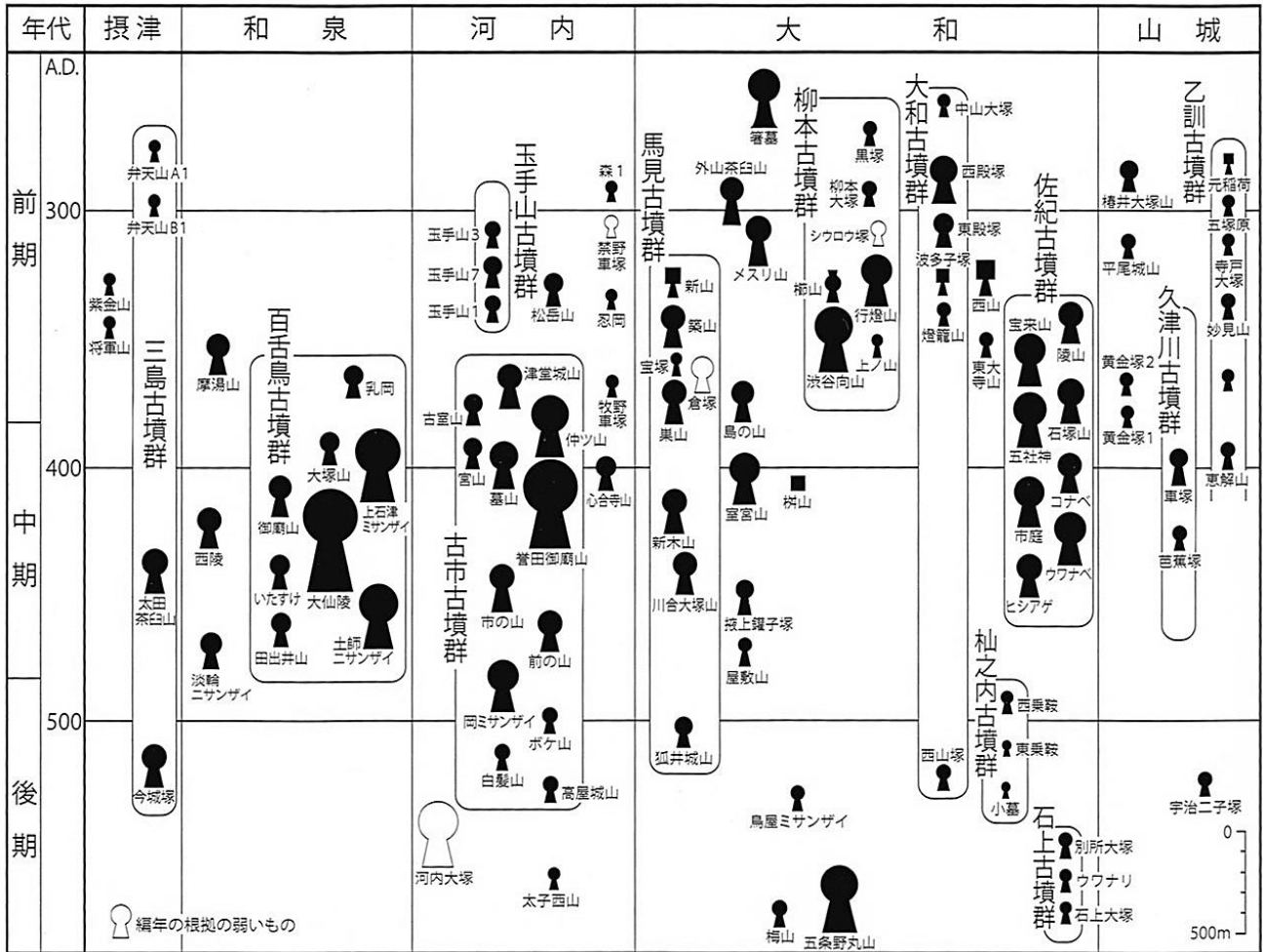
②百舌鳥古墳群分布図



③古墳の規模別ランキング

1	仁徳天皇陵古墳(大山古墳)	486m	大阪府堺市堺区大仙町
2	応神天皇陵古墳(誉田御廟山古墳)	425m	大阪府羽曳野市誉田
3	履中天皇陵古墳(上石津ミサンザイ古墳)	365m	大阪府堺市西区石津ヶ丘
4	造山古墳	350m	岡山県岡山市新庄下
5	河内大塚山古墳	335m	羽曳野市南恵我之荘・松原市西大塚
6	五条野丸山古墳	310m	奈良県橿原市見瀬町・五条野町
7	土師ニサンザイ古墳	300m 以上	大阪府堺市北区百舌鳥西之町
8	渋谷向山古墳(景行陵)	300m	奈良県天理市渋谷町
9	仲姫命陵古墳(仲津山古墳)	290m	大阪府藤井寺市沢田
10	作山古墳	286m	岡山県総社市三須
11	箸墓古墳	280m	奈良県桜井市箸中

④古墳編年図



(この編年表は、白石太一郎氏 2013年6月補訂)

※百舌鳥耳原の由来：

仁徳天皇が狩猟中、鹿が飛び出してきて倒れた。見ると百舌鳥が耳から飛び込み脳みそが食い荒らされていた」との言い伝えによる。古事記には「御陵は毛受(もず)の耳原にあり」の記がある。

2、履中天皇陵古墳(百舌鳥耳原南陵)

(1) 築造時期・被葬者

- ・ 5世紀前半の築造。宮内庁により(第17代履中天皇陵)に治定。
- ・ 仁徳天皇の第一皇子。母は葛城磐之姫。5世紀前半には実在したとみられる。
(弟は18代反正天皇)
- ・ 別名：上石津ミサンザイ古墳・石津が丘古墳ともいう。
- ・ 出土資料より仁徳天皇陵古墳より古く、5世紀前半に造られたことがわかっている。

(2) 墳形・規模・周濠

- ・国内3番目の前方後円墳。墳丘は3段築成で西側のくびれ部分に造り出しがあり、10基ほどの陪塚を従えていた(現在2基のみ)。かつて存在した七観山古墳の出土資料などから大量の副葬品が出土、埋納するための陪塚の可能性はある。
- ・墳長約365m、後円部径205m、高さ27、6m。前方部幅235m、高さ25、3m
- ・一重の盾形周濠が巡っているが、平成6年(1994年)に外側に幅10mの二重目の周濠が発見されている。

(3) 発掘・出土品・埋葬施設

- ・主体部の構造や副葬品などはわかっていないが、葺石と埴輪が出土。江戸時代の記録で後円部中央に大きなくぼみがあったといわれていることから、すでに盗掘を受けている可能性がある。
- ・埋葬施設は不明

3、仁徳天皇(陵)について

仁徳天皇陵古墳は東アジア世界に進出した「倭の五王」の中の一人を葬った墓といわれ、古代史を解明する上で重要な文化遺産である。

(1) 倭の五王とは誰か

(日本の歴史書より)

- ・「古事記」、「日本書紀」では16代天皇と伝えられ、本名は大雀、大鶴鷄(おおさぎき)で「仁徳」は8世紀頃につけられたおくり名。「日本書紀」では在位87年で没したと記されている。また古事記では83歳で亡くなったと記されている。
- ・父は応神天皇(15代)、母は仲姫命(なかつひめのみこと)、即位後、都を難波高津宮に定め、葛城磐之姫を皇后とし、のちの履中天皇(17代)・反正天皇(18代)・允恭天皇(19代)をもうける。善政を行ったので古来より聖帝と称えられる、理想的な天皇とされている。

①「倭の五王(讚・珍・斉・興・武)」は誰か

- ・五王のうち斉、興、武がそれぞれ允恭、安康、雄略天皇にあたるであろうことについてはその相互の続柄からもほとんどの研究者の意見は一致している。
- ・最初の二人については研究者の中で意見が異なり、「讚」については履中ないし仁徳、さらに応神をあてる説など諸説があり意見の一致がみられない。

②大型古墳の造営時期と古墳の主

- ・考古学的成果を踏まえて、最も古い上石津ミサンザイ古墳を仁徳陵にそれに続く大仙古墳を履中陵に土師ミサンザイ古墳を反正陵にあてれば一応、百舌鳥古墳群の範囲内では文献の記載と考古学的な年代観とは整合的に説明できる。
- ・しかし、この考え方をとると菅田御廟山古墳を応神天皇陵、大仙陵古墳を仁徳天皇陵とする考え方と矛盾する。
- ・現在の考古学的な研究から被葬者を決定することは困難であると言わざるを得ない。

《参考》

倭の五王と天皇陵との関係・池田仁三著「画像解析によって判明した古墳墓碑」より

	推定生存年	天皇名	宮内庁の治定陵	通説的な築造年
讚	320年～394年	応神天皇？	菅田御廟山古墳(羽曳野市)	5C 第I 四半期
讚	337年～419年	仁徳天皇？	大仙古墳 (堺市)	5C 中頃
讚	369年～432年	履中天皇？	上石津ミサンザイ古墳 (堺市)	5C 前半
珍△	380年～438年	反正天皇	田出井山古墳 (堺市)	5C 後半
齊△	393年～453年	允恭天皇	市野山古墳 (藤井寺)	
興△	416年～456年	安康天皇	菅原伏見西陵古墳(奈良市)	
武○	418年～479年	雄略天皇	高鷲丸山古墳 (羽曳野市)	※仲哀天皇陵古墳

※宮内庁では岡ミサンザイ古墳(藤井寺市)を14代仲哀天皇に治定しているが、近年で雄略天皇陵に比定するのが有力視されている。

《まとめ》

白石太一郎著・「古墳の被葬者を推理する」によれば、

「倭の五王」の時代には日本列島から大陸に文物特、特に朝鮮半島に産する鉄を求めて、さかんに海外進出した時期で、仁徳天皇はその時期に活躍した大王の一人かもしれない。

「延喜式」陵墓歴名については、日本の古代律令国家が天皇陵や天皇の系譜の継続性を示すのに重要な役割を果たした皇族の陵墓を国家として守護し、祭紀を行うことを定めた際にまとめ上げたリストであったと考えられ、「延喜式」にみられる具体的、相対的な位置関係を示すような陵名はその時定められたもので、必ずしも確かな根拠を持つもとは考えられない。

したがって仁徳、履中、反正の陵について、それらが中、南、北の位置関係にあるとする「延喜式」の記載は疑わしい。

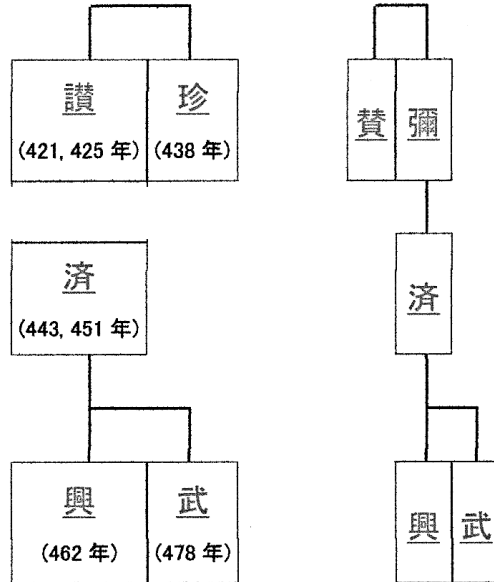
以上

《参考》 天皇と倭の五王の関係図

倭の五王系譜・天皇系譜

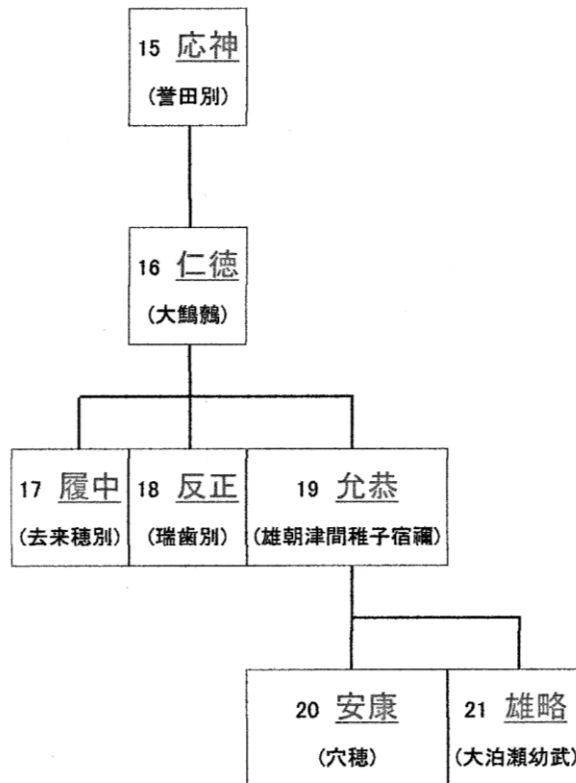
『宋書』倭国伝

『梁書』倭伝



『日本書紀』の天皇系譜

(数字は代数、括弧内は和風諡号)



反正天皇陵と土師ニサンザイ古墳

By 田積 彰男

1、反正天皇陵古墳（田出井山古墳）

百舌鳥古墳群の北端にある前方部を南に向けた前方後円墳で、現在は百舌鳥耳原三陵の北陵・反正天皇陵として宮内庁が管理している。

墳丘の規模は全長約 148m、後円部径約 76m、高さ約 13m、前方部幅約 110m、高さ約 15m で百舌鳥古墳群では 7 番目の大きさである。仁徳天皇陵古墳の 1/3 ほどの大きさで、天皇陵では小さいほうであるが理由はよくわかっていない。

墳丘は 3 段に築かれその形や出土した埴輪から、5 世紀中頃に造られたと考えられている。現在一重の盾型周濠がめぐっているが、周囲で行われた発掘調査で、かつて二重濠があったことが確認されている。

周辺には陪塚と推定される鈴山古墳・天王古墳があり、宮内庁が管理している。

（1）反正天皇とは

仁徳天皇の第三皇子。母は葛城襲津彦の女・磐之媛命。履中天皇・住吉仲皇子の同母弟、允恭天皇の同母兄に当たる。

父仁徳天皇の崩後、即位した 17 代履中天皇に対し住吉仲皇子が叛乱を起こしたとき、その部下の隼人を利用して誅殺した。履中崩御後、18 代天皇に即位。兄弟継承はここに始まる。5 年後に反正天皇が崩御。その跡を弟の允恭天皇が継いだ。

（エピソード）

父帝である仁徳天皇の死後、跡継ぎとなる太子は既に第 1 皇子（のちの履中天皇）のと決まっていた。そのような中、第 2 皇子の住吉仲皇子は自分こそが太子だと偽って太子の婚約者である葛城黒媛 とまぐわってしまった。

これを知られた住吉仲皇子は反乱を企て、太子の宮殿に火を放った。太子は命からがら石上神宮に逃げ延びた。そのとき救援に来たのが後に反正天皇となる第 3 皇子の瑞齒別皇子である。しかし命を狙われ疑心暗鬼となっている太子には住吉仲皇子を誅殺すれば会おうと告げられてしまった。

そこで瑞齒別皇子は住吉仲皇子のいる難波へと向かい、住吉仲皇子の側近で隼人の刺領中へ大臣の位を餌に暗殺をそそのかす。これを真に受けた刺領中は厠に入っている住吉仲皇子を矛で刺し殺した（従って本人は直接手を下していない）。任務を成功させたとはいえ、刺領中の行為は義にもとるものだった。そこでねぎらいの酒を酌み交わし刺領中の頭が大きな杯で覆われた隙に剣で首を切り落としてしまった。

こうして履中天皇の即位が確定し、瑞齒別皇子自身は太子となった。

2、土師ニサンザイ古墳（はぜにさんざいこふん）

百舌鳥古墳群の南東端にある前方部を西に向けた大型前方後円墳で、墳丘の規模は全長約 300m、後円部径約 170m、高さ約 24.6m、前方部幅約 224m、高さ約 25.9m で日本の古墳群では 7 番目の大きさである。

3 段に築かれた墳丘はくびれ部の両側には造出しがあり、主体部の構造や副葬品は不明で、葺石と埴輪のあることが確認されている。現在は一重の盾形周濠がめぐっているが、昭和 51 年(1976 年)に周囲の発掘調査で外濠のあることがわかった。

この周濠には木橋が架けられていたことが判明しており、検出された橋脚柱穴によればその規模は幅約 12 メートル・長さ 45 メートル以上と古墳時代最大級になるが、短期間で撤去されていることから葬送用の一時的な橋であったと推測される。百舌鳥古墳群の大型前方後円墳の中では最も新しく、5 世紀後半に築造されたと見られている。

実際の被葬者は明らかでないが、宮内庁により「東百舌鳥陵墓参考地」（被葬候補者：第 18 代反正天皇の空墓）として陵墓参考地に治定されているほか、内濠は国の史跡に指定されている。

前方部が広くどっしりと安定感のある古墳で、反正天皇陵古墳(田出井山古墳)のほぼ 4 倍の大きさである。また建造時期もほぼ同じことから、これを反正天皇陵と考えている説もある。

前方部の向きの違いの意義はハッキリしないが、百舌鳥古墳群で西向きは土師ニサンザイ古墳のほか、長塚古墳・大塚山古墳・いたすけ古墳・御廟山古墳・尼塚古墳などがあるが、南西向きの仁徳天皇陵古墳や履中天皇古墳などの被葬者が天皇に対して、西向きは天皇陵ではないグループかもしれないとも云う。

「ニサンザイ」は「ミサンザイ」すなわち「ミササギ（陵）」の転訛したものと考えられている。前方部が大きく広がったその姿は古墳群の中で最も精美といわれる。

以上

9月度歴史文化クラブ研修会

参加者名簿

整理番号	氏名 (敬称略)	出欠	参加費	収納	備考
No.1	青木 幸子		4000円		事務局
No.2	池田 富子		4000円		
No.3	池山 怜子		4000円		
No.4	上西 千代子		4000円		
No.5	内河 洋文		4000円		
No.6	太田 和則		4000円		
No.7	小田 進八郎		4000円		
No.8	塩本 勝也		4000円		
No.9	鈴木 末一		4000円		
No.10	田代 一行		4000円		担当世話人
No.11	田積 彰男		4000円		担当世話人
No.12	田矢 恵造		4000円		
No.13	坪井都子		4000円		
No.14	寺田 孝		4000円		
No.15	富井 忠雄		4000円		
No.16	富江 文雄		4000円		
No.17	中井 弘		4000円		担当世話人
No.18	福田 美伸		4000円		
No.19	古川 祐司		4000円		代表
No.20	宮崎 仁		4000円		
No.21	森 英雄		4000円		
No.22	吉川 公子		4000円		
No.23	吉川利文		4000円		
No.24	吉田 登志子		4000円		
No.25	山本 妙子		4000円		
No.26	八木 順一		4000円		
No.27	八木 健彦		4000円		
参加者 合計 27名			参加料計	108,000円	

(2019年9月11日)